

# 大東文化大学 博士学位論文審査報告書

氏 名 中村 薫  
ナカムラ カオル

学 位 博士 (書道学)

学 位 記 番 号 甲第 108 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 26 年 3 月 22 日

審 査 研 究 科 文学研究科

論 文 題 目 米芾の平淡の研究

論 文 審 査 委 員 (主査) 大東文化大学教授 河内 利治  
(副査) 大東文化大学教授 安達 直哉  
(副査) 大東文化大学教授 澤田 雅弘  
(副査) 筑波大学人間総合科学研究所教授 中村 伸夫

## 中村薰 博士論文 審査報告

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

### 1. 論文の要旨および特色

中国書道史上、北宋の四大家の一人である米芾（1051～1107）は、「集古字」と呼ばれるほど歴代の名品を学書し、遂に〈平淡〉の境地に辿りついたとされる。本論文は、従来の研究成果を踏まえながら、米芾が〈平淡〉に辿りつくまでの学書過程を、統計学の解析手法を用いて書跡の時代区分を試み（第一章）、過眼した書跡に見出した美意識は如何なるものであったのかを米芾の書論『宝章待訪録』に絞って術語を抽出して考察し（第二章）、その背景にある宋代文人の〈平淡〉の概念は如何なるものであったかを『宋代詩話』から抽出して分類し（第三章）、最後に米芾自身にとって〈平淡〉は如何なる意味を持つものであったかを論じるものである（第四章）。

まず目次に従って全体構成を概観すると、以下の通りである。

## 目 次

### 序 論

第一節 研究目的と意義

第二節 先行研究

第三節 研究の方法

三・一 美の変遷の研究の方法—統計学的手法による視覚的確認

三・二 宋代詩話に見る〈平淡〉の意義解釈

## 第一章 米芾の書の変遷 — 統計的手法の可能性 —

### 序

第一節 米芾の学書の確認

第二節 米芾の書の第一転換期

二・一 欧陽詢の書と米芾

二・二 王羲之の書と米芾

二・三 第一転換期前後の米芾作品

二・四 統計学的解析

二・五 統計学的解析結果から見た第一転換期の書の変遷

第三節 米芾の書の第二転換期

三・一 褚遂良から王献之の書へ

三・二 自らの審美感に合わない者への激烈な評論

三・三 平淡・天真の自覚・第二転換期の米芾作品

三・四 「芾」、「書」字判定による制作時期測定

三・五 統計学的解析結果から見た第二転換期の書の変遷

第四節 小結

### 注

付録 第一章資料集

## 第二章 『宝章待訪録』に見る審美術語 — 〈精神〉〈入神〉〈篆籀氣〉〈奇古〉〈清古〉 —

### 序

第一節 〈精神〉〈入神〉

一・一 〈精神〉

一・二 〈入神〉

一・三 まとめ

第二節 〈篆籀氣〉

二・一 まとめ

第三節 〈奇古〉〈清古〉

三・一 〈奇古〉

三・二 〈清古〉

三・三 まとめ

第四節 小結

注

### 第三章 宋代における平淡の考察 — 宋代詩話を中心として —

序

第一節 〈平淡〉の淵源

第二節 宋代詩話に見る〈平淡〉

第三節 〈平淡〉の考察

第四節 小結

注

付録 宋代詩話に見る〈平淡〉の使用例一覧

### 第四章 米芾の平淡天真

序

第一節 宋代における平淡天真の流行

一 宋代初期の西嶽体詩の隆盛

二 梅堯臣の求めた平淡

三 欧陽脩の平淡

四 蘇軾の天真

第二節 米芾の平淡天真

一 米芾の痛烈な評論

二 米芾の平淡天真的特徴

第三節 米芾の平淡天真的背景

一 徽宗の四学の設立

二 米芾の平淡天真的考察

第四節 小結

注

### 結論

### 参考文献一覧

以下に、各章の要旨と特色を述べる。

## 第一章 米芾の書の変遷 — 統計的手法の可能性 —

米芾の学書遍歴を辿り、彼が書き遺した作品と彼の学書対象の作品を確認し、米芾の書がどの様に変遷したかを視覚化し、客観化することを目的とする。米芾の書の注目すべき変化の時期は、壯年の元豐五年（1082、32歳）に黄岡で蘇軾に会い、その説を聞いて初めて専ら晋人の書を学ぶようになり、その学書が大いに進んだとされる時期（第一転換期）と、熟年にて自ら〈平淡〉を自覚したとする時期（第二転換期）に区分できることを論証した。

元豐六年（1083、33歳）の《方円庵記》以前には有年紀作品が無いため、〈平淡〉の自覚の時期に定説が無い。本章は自序や遺された書跡などに述べられている内容を基に、現存する作品の中から作品を特定し、その作品と米芾の学書対象作品の統計学的数値解析を行い、それらの類似性を図式で確認する試みを行った。併せて西川寧氏が述べた落款の年代変化を統計学的手法により数式化し、普遍化する試みも行った。

考察の結果は、以下の通りである。

- (1) 第一期の転換期作品として、長沙時代と考えられる《法華台詩》他三帖と元豐六年（1083）の《方円庵記》、元祐三年（1088）の《苕溪詩卷》等を用い、統計学的分析により図式化し、歐陽詢風から王羲之風に書が変化して行く過程を推定した。
- (2) 《苕溪詩卷》や長沙時代の書とも一変し、文字の傾斜度はさほど変わらないが極めてスムーズに変化し均衡が取れていることから、「晋魏の平淡に入る」と米芾自らがいう第二転換期は、《群玉堂米帖（自叙帖）》等が書かれた時期であり、統計的年代測定から崇寧元年頃（1102、52歳）と推定した。
- (3) 西川寧氏が提起した落款「芾」字に加え、「書」字についても、その年代変化を統計学的手法で数式化し、有用性を確認した。誤差許容幅を考慮すれば、年代不明作品の年代推定が可能であり、応用範囲の広い有効な手段と考えられることを提起した。

## 第二章 『宝章待訪録』に見る審美術語—〈精神〉〈入神〉〈篆籀氣〉〈奇古〉〈清古〉—

『宝章待訪録』は、米芾が過去に目覗、伝聞した歴代書跡の記録であり、客観的事実を簡明に記述した文である。『宝章待訪録』では、米芾が特に感銘を受けた作品に審美術語を用いて評価している。そのなかで、特に魏晋の書家（王羲之と晋武帝）に対する審美術語に着目した。『宝章待訪録』は、著した時期が元祐元年（1086、36歳）と特定できることと、米芾が蘇軾に黄岡で謁してより晋人の書に益々傾倒して行き、米芾の書が大いに進んだとされる時から間もない時期（四年後）の著であること、以上の二点において重要である。蘇軾に謁して以降、晋人の書跡のみならず歴代書家の書の収集もまた並々ならぬものとなつた。後に米芾の《群玉堂米帖（自叙帖）》にいう「晋魏の平淡に入り」、書の真髓を捉えたと自認する魏晋の書に冠せられた審美術語は重要である。

米芾の審美術語を検討する上で用いた資料は、歴代書論（晋『衛夫人筆陣図』撰者不明から宋『書苑菁華』陳思撰までの23件）、米芾の著書『宝章待訪録』、他に『文心雕龍』、

『歴代名画記』などを用い用例の考察を行った。

考察の結果は、以下の通りである。

- (1) 王羲之の書に冠せられた審美術語は〈精神〉〈入神〉である。〈精神〉は、「こころ」「風神、風采」「生氣、氣概」の意であり、その用いられた歴代書論から見る推移は、「こころ」⇒「風神、風采」⇒「生氣、氣概」の順であった。米芾は〈精神〉を「こころ」および「生氣、氣概」の意で使った。〈入神〉は「（芸術において）〈神〉を超えた極めて高い境地」をいい、人為のなせるわざではない「神妙の境地」、「一種の技芸の神妙の境に達到する」ことをいう。『宝章待訪録』を著した時期は、米芾は王羲之に「技芸の神妙の境」を感じていた。
- (2) 晋武帝の書に冠せられた審美術語は〈篆籀氣〉〈奇古〉〈清古〉である。〈篆籀氣（象）〉とは、「小篆や古文（小篆以前の大篆などの書体）のもつ結体、字体のような古雅純朴で〈俗〉を排除する力強い気風」をいい、〈奇古〉は「珍しく古雅な趣き」をいい、〈清古〉は「清らかでいにしえの純朴さ脱俗」をいう。〈篆籀氣〉〈奇古〉〈清古〉は何れも「古」を表すものであり、〈俗〉に対置される。背景には中国文化の尚古主義と、欧阳脩を嚆矢とする宋代金石学の広がりが関係している。『宝章待訪録』を著した時期は、米芾は晋武帝に対して、「古雅純朴」や〈俗〉を排除する「力強い気風」や「清らかさ」を感じていた。

### 第三章 宋代における平淡の考察

宋代の文人は詩話の中で頻繁に〈平淡〉を用いて詩にまつわる話を論じている。欧阳脩によって生み出されたとする宋代初期の詩話は、『六一詩話』に見るように、第三者の文を引用して筆者自身が語りかける叙述形式の体裁を取り、「詩や詩人にまつわるはなし」を述べる。しかし内容は「詩」に留まらず、「書」「画」「樂（音楽）」などの文人達の嗜む六芸に関する逸事も記述する。日常の飾らない記述内容は、当時の文学、芸術事情や文人の考えを探る上で格好のものであり、宋代の文人達の使った〈平淡〉の審美術語の意味を広く探し検討することは、米芾の〈平淡〉を考える上で極めて重要である。

『宋詩話全編』（吳文治著、江蘇古籍出版 1988 年）が採録するのは『四庫全書総目提要』より詩話専書 78 種、『中国叢書綜錄』82 種、『宋詩話考』の 139 種（流伝 42 種、部分流傳 46 種、佚文 51 種）、総計 10788 頁、404 万字からなり、宋代の文人延べ 474 家からのものを採録する龐大なものである。これらの中から全ての〈平淡〉（〈平澹〉を含む）を抽出しその用例を考察した。

考察の結果、宋代詩話に見られる〈平淡〉の意味を、次の 6 類に分類し得た。

- 第一類 〈平淡〉表現：詩文、詩曲、画の飾りたてない表現
- 第二類 〈平淡〉表現：詩文、詩曲の平明な表現
- 第三類 〈平淡〉表現：詩文のおだやかな表現
- 第四類 〈平淡〉表現・境地：詩文の自然さ、おだやかさ

第五類 〈平淡〉 境地：作詩が熟達老練にいたる境地

第六類 〈平淡〉 風格：泰然自若、脱俗的人品の風格

第一類から第三類に分類される〈平淡〉は、〈平〉や〈淡〉が元来持っていた意味であり、第四類から第六類は〈平〉と〈淡〉が結びついた結果、その意味が膨らんでいったものであり、宋代文人達の用いた〈平淡〉は、広い意味を持つものであった。特に宋代においては、〈平淡〉が「あっさり」などの単なる表現を修飾する形容詞ではなく、「外枯中膏」や「漸老漸熟」のように、作詩が辿りつく境地や人品の風格を表すのに用いられることが判明した。

#### 第四章 米芾の平淡天真

『海岳名言』、『画史』、『宝晋英光集』などに見える米芾の歴代書家への評論は、余りにも過激である。崇寧五年（1106、56歳）の「跋顏書」に〈平淡〉の語を用いて過激な評論が見られるが、それは米芾が〈平淡〉を自覚したとする時期、崇寧元年（1102、52歳）から四年後、書画学博士に就任後の時期である。その過激さは、書の真髓を捉えた境地に超然と辿り着いた者の評論ではない。米芾をして何がかく語らしめたのかを、〈平淡〉から考察し、さらに先行研究の意味する所を再考した。

〈平淡〉は『老子』や『莊子』、また劉邵『人物志』や鍾嶸『詩品』に淵源を持ち、宋代にあっては、歐陽脩や梅堯臣等がその文学活動において〈平淡〉の気風を尊重した。米芾は董源、巨然の画に価値を見出し、〈平淡〉や〈天真〉と称え、〈平淡〉や〈俗〉を以て李成、柳公權、顏真卿らを斥けた。当時の文人達は〈俗〉を忌避したが、米芾が更に過激に反応した。その背景に自らの出自があり、書画学博士の就任があり、「奴書」とよんだ通行体書風の氾濫があり、活字文化の蔓延が有った。それらを〈俗〉として嫌惡する意識が、米芾をして〈平淡〉を語らしめ、それを過激に排撃したと論じた。

考察結果は、以下の通りである。

(1) 米芾が用いた〈平淡〉は次の四種類である。

米芾〈平淡〉：淡泊で自然な表現←→『宋代詩話全編』〈平淡〉第一類

米芾〈平淡〉：あっさりと平明な表現←→『宋代詩話全編』〈平淡〉第二類

米芾〈平淡〉：あるがまま自然に向かう境地←→『宋代詩話全編』〈平淡〉第四類

米芾〈平淡〉：熟達老練の境地←→『宋代詩話全編』〈平淡〉第五類

(2) 米芾が用いた〈天真〉は、自然のままの姿、自然の風趣、天から与えられた、の意を持つ。

(3) 「奴書」とよばれた通行体の書風や低俗な作品、活字文化の蔓延など、当時の社会に蔓延する〈俗〉に対する嫌惡ともいえる批判が、米芾をして〈平淡〉〈天真〉を語らしめたといえる。米芾の〈平淡〉〈天真〉を用いた激烈な評論の背景には、米芾の鬱いがあり、米芾の周辺には耐えがたい「俗に拘わらず」では済まされない現実への強い思いが在った。

## 結論

本論文での考察の結果、以下の結論を得た。

- (1) 統計学の解析の結果、米芾が魏晋の〈平淡〉を自認して、自叙を書いたのは 52 歳頃と推定でき、その作品の特徴を把握し得た。また米芾の「芾」字、「書」字が、経年的に変化することを確認し、その年代推定の方程式を得た。この手法は、制作年不明作品の年代推定に有効である。感覚的に特定文字に着目し、その特徴から作品の時代を推定する手法は、西川寧氏の論著にも見られるが、数理統計学的に、数式化、図式化した試みは先行研究に見られない試みである。
- (2) 米芾が過眼した書跡を『宝章待訪録』に記した審美術語は、〈精神〉〈入神〉〈篆籀氣〉〈奇古〉〈清古〉であり、その評価を与えた魏晋の書は、王羲之、晋武帝の書であった。王羲之の書には、作品に宿る「神靈的こころ」や「神妙な境地」を、また晋武帝には、小篆や古文の持つ結体、字体のような古雅純朴で〈俗〉を排除する力強い気風の〈篆籀氣〉、珍しく古雅な趣きの〈奇古〉、清らかで古の純朴さ脱俗さの〈清古〉を以て評価している。〈篆籀氣〉〈奇古〉〈清古〉は、いずれも古質、脱俗のもので、虞龢の『論書表』などに見られる「古質今妍」の「古」を貴ぶ概念である。
- (3) 宋代文人達の用いた〈平淡〉は、六類に分類でき、時代とともに広がったことを論じた。宋代にあっては、〈平淡〉が「あっさり」などの単なる表現を修飾する形容詞ではなく、「外枯中膏」(孫覲『鴻慶居士文集』に引く蘇軾が陶淵明を評した語) や「漸老漸熟」(周紫芝『竹坡詩話』に引く蘇軾が姪に送った手紙の語) のように作詩の辿りつく境地や人品の風格を表すのに用いられる含蓄に富む審美術語に繋がっていることを指摘した。
- (4) 米芾の歴代の書家を見下した激烈な評論は、自らが到達した境地を過度に意識した自負から発せられたものばかりでない。『清波雜誌』などの賡作露見の逸事、進士及第者でないこと、また奇行による弾劾文が見られることから、『世説新語』任誕篇や簡傲篇に称えられる瀟洒な人物でもない。激烈な評論の背景には、米芾の闘いがあり、また蔡京に阿る行為などを見てもわかるように〈俗〉人的であり、世俗の中から抜け出すことを強く願い、もがき発した評論ではなかったかと結論づけた。

## 2. 論文の審査内容および評価

米芾は、中国書道史上では《苕溪詩卷》や《蜀素帖》など行草体の名品を書いた宋代の四大家の一人として、かつ中国書論史上でも『書史』『宝章待訪録』『海岳名言』など重要な書跡に対する過眼、鑑定、批評の著作を遺した人物として、評価が非常に高い。そのため中国、日本のみならず欧米においても研究者が多く、先行研究の内容も多岐にわたる。そのなかで稿者は、〈平淡〉という言葉をキーワードにして、米芾にとっての〈平淡〉が何を意味するかを考察しようとした。「序論」に記されるこの研究目的は、中田勇次郎『米芾』

1983、L. レタローゼ『米芾 人と芸術』1987、塘耕次『米芾』1999、大野修作『書論と中国文学』2001 からヒントを得たものであるが、それらで深く考察されて来なかった宋代における〈平淡〉の意味するものを解釈して、米芾にとっての〈平淡〉の意味するものを考察しようとした点が、本論文の研究の意義である。そのために、四章構成で着実に論述を構築していった本論は、各章が独立した論述でありながら、一貫する有機的な論証性を持つており、緻密な構成になっている。まずこの点を評価しておきたい。

第一章「米芾の書の変遷—統計的手法の可能性—」は、「最小二乗法」<sup>1</sup>を用いて文字の傾斜角度（右放左収度・上小下大度）を数値解析した。解析対象とした米芾の書跡<sup>2</sup>には、書写時期を長沙時代と推定した《三吳詩帖》台北故宮博物院蔵、《法華台詩帖》《道林詩帖》《砂步詩帖》北京故宮博物院蔵、および1083年書《龍井山方円庵記》宝晋齋法帖本と1085年書《苕溪詩卷》北京故宮博物院蔵を使用し、歐陽詢《卜商帖》快雪堂帖本・《度尚庾亮帖》戲鴻堂帖本、王羲之の字を集めた《集字聖教序》と比較解析し、二次元相関図、レーダーチャートならびに遷移解析図を作成して、次の三群に分れることを図示した。

- (A) 群=欧陽詢《卜商帖》／《法華台詩帖》・《道林詩帖》・《砂步詩帖》
- (B) 群=《集字聖教序》・欧陽詢《度尚庾亮帖》／《三吳詩帖》
- (C) 群=元豐六年・1083年書《龍井山方円庵記》、元祐三年・1088年書《苕溪詩卷》

この解析結果と併せて、「1082年（元豐五年、32歳）3月に、黃岡で蘇軾に会って晋人の書を学ぶようになった」<sup>3</sup>との言説とが照合することから、米芾が(A)群=欧陽詢を学び、ついで(B)群=王羲之を学び、さらに(C)群へと変遷してゆく過程を実証し、この時期を第一転換期と判断した。

さらに、《群玉堂米帖（自叙帖）》の301文字、1102年頃書《紫金研帖》北京故宮博物院蔵の44文字、《鄉石帖》北京故宮博物院蔵の27文字の中から共通する文字（吾、得、不、書など23字）を抽出し、同様の手法を用いて解析した結果、この三件の作品の数値が近似することから、第二転換期はこれらの作品が書かれた時期、すなわち建中靖国元年=崇寧元年（1102、52歳）頃と推定した。つまり稿者は、米芾が〈平淡〉を自覚した時期を52歳頃と推定する。また署名が「米黻」から「米芾」に変わった41歳（元祐六年、1091）から没する57歳（大觀元年、1107）までの「芾」字を同様の手法で解析し、加えて「書」字も解析した結果、解析手法が経年変化を表す上でも有効であることを提起した。

<sup>1</sup> 最小二乗法（さいしうにじょうほう、さいしうじょうじょうほう；最小自乗法とも書く、least squares method）とは、測定で得られた数値の組を、適当なモデルから想定される1次関数、対数曲線など特定の関数を用いて近似するときに、想定する関数が測定値に対してよい近似となるように、残差の二乗和を最小とするような係数を決定する方法、あるいはそのような方法によって近似を行うことである。本論では、稻葉三男・北川敏男『統計学通論』共立出版社1967年発行の「相関関係図」「平均値」「偏差値」「標準偏差」の処理式に則り、「標準偏差±2.5σ」の近似値で測定する。

<sup>2</sup> 伝来する米芾の書跡は約200点ある（中田勇次郎『米芾』および『中国書法全集・米芾』栄宝齋）が、有記年作品は10数点しかなく、なかでも30歳代では、元豐6年、1083年、33歳書《龍井山方円庵記》と元祐3年8月、1088年、38歳書《苕溪詩卷》および同年9月書の《蜀素帖》しかない。

<sup>3</sup> 王文詒『蘇文忠公詩編註集成』および宋拓《方円庵記》の温叔度の跋文に拠る。

総じて第一章は、米芾が〈平淡〉に辿りつくまでの学書過程を、統計学の解析手法を用い、書跡の転換期を見出して二つの時代区分を試み、晩年の52歳頃から〈平淡〉の境地の作品を制作し始めたと推定するものである。

従来、書道学あるいは中国書学の研究領域において、数値解析に拠る研究方法を提示した論著は少ない。稿者は勤務先において長年に亘る数式に基づく実務経験があることから、説得力のある解析結果を導き出している（「付録 第一章資料集」の解析図の通りである）。このような科学的な研究方法を導入して書跡を分析した点は、非常に高く評価できる。

第二章「『宝章待訪録』に見る審美術語—〈精神〉〈入神〉〈篆籀氣〉〈奇古〉〈清古〉」は、米芾撰『宝章待訪録』全一巻に見える書を批評した術語から、特に王羲之と晋武帝に対して評された〈精神〉〈入神〉〈篆籀氣〉〈奇古〉〈清古〉の五つの審美術語に着目し、歴代書論（晋『衛夫人筆陣圖』から宋『書苑菁華』までの23件）を中心に比較考証して、米芾自身の書に対する美意識を探ろうとした意欲的な一章である。

そもそも『宝章待訪録』は米芾自身が「目観（実見）」した王羲之《快雪時晴帖》など54種、「的聞（伝聞）」した懷素《自叙帖》など29種の、当時の士大夫が所蔵する晋唐の墨跡を記録したものである。著作年代が元祐元年（1086、36歳）と特定できることから、書跡を考察する上で貴重かつ重要な文献であり、そのため研究成果も多い。

しかし稿者の視点は、米芾が「晋魏の平淡に入る」と書した言葉に繋がる美意識にあり、それを〈精神〉〈入神〉〈篆籀氣〉〈奇古〉〈清古〉の五つの審美術語から探る手法を取った。この視点は、結果的には米芾がどのような歴代の審美術語を踏襲し、それをどのような書に対して使用したかの成果を導き出せている。すなわち王羲之の書に冠せられた審美術語は〈精神〉〈入神〉であり、晋武帝の書に冠せられた審美術語は〈篆籀氣〉〈奇古〉〈清古〉であるとの首肯できる結論である。但し、〈神〉〈氣〉〈古〉といった重要な概念から〈平淡〉への繋がりを論じきれず、さらなる考察を必要とする。とはいっても、米芾の魏晋の書に対する美意識の一端を探り出せた点は評価に値しよう。

第三章「宋代における平淡の考察」は、『宋詩話全編』所収の全474家の記述を精査して全ての〈平淡〉（〈平澹〉を含む）の叙述206例から69例を絞込み、分類し、考察したものである（「付録 宋代詩話に見る〈平淡〉の使用例一覧」がその出典用例である）。

「詩話」は詩の批評や詩人の逸話についての叙述である。その中で頻繁に〈平淡〉を用いて詩を批評することに着目し、『宋詩話全編』に見える〈平淡〉の意味を、大きく6類に分類し、さらに表現、境地、風格の3類に集約し得たことは一つの成果である。

そもそも〈平淡〉は、審美術語としては、「平和（おだやか）」で「淡遠（おくぶかい）」、「質朴で自然だ」という特徴を備えた、芸術の風格や境地のことである。〈平淡〉という言葉は、六朝時代から現れるが、もとは『老子』の「淡乎として味わい寡し（淡乎寡味）」を意味し、それには否定的な意味合いが含まれていた。それが宋代にどのように使用された

かに着目し、〈平淡〉が、詩文の「飾りたてない」「平明な」「おだやか」「自然な」味わいの表現を、作詩の熟達老練にいたる境地を、泰然自若、脱俗的人品の風格を指すと3類に帰納したことにより、〈平〉と〈淡〉が元来持っていた意味と、〈平〉と〈淡〉が結びついて派生した意味とによって、宋代文人達の用いた〈平淡〉がより広い意味を持つものであったことを指摘でき、かつ特に宋代には〈平淡〉が「あっさり」などの単なる表現を修飾する形容詞ではなく、ともに蘇軾の言葉だが「外枯中膏」や「漸老漸熟」のように作詩が辿りつく境地や人品の風格を表すのに用いられることを指摘することに繋がった。この成果は、『宋詩話全編』所収の全用例を精査したことにより得られたものであり、宋代の文人における〈平淡〉の指す内容を整理し得た労作の一章であると評価し得る。

第四章「米芾の平淡天真」は、『海岳名言』『画史』『宝晉英光集』などに見える米芾の歴代書画家への評論から、米芾自身にとって〈平淡〉および〈天真〉が如何なる意味を持ち、それをどのように用いたかを論じるものである。そのために第三章「宋代における〈平淡〉の考察」を踏まえ、宋代にあっては、欧陽脩や梅堯臣等がその文学活動において〈平淡〉の気風を尊重したこと、米芾は董源、巨然の画に価値を見出し、〈平淡〉や〈天真〉と称えたこと、〈平淡〉や〈俗〉を以て李成、柳公權、顏真卿らを斥けたことを指摘する。そして稿者は、「米芾の〈平淡〉〈天真〉を用いた激烈な評論の背景には、米芾の闘いが有り、米芾の周辺には耐えがたい「俗に拘わらず」では済まされない現実への強い思いが在った」と本章で結び、「激烈な評論の背景には、米芾の闘いが有り、また蔡京に阿る行為などを見てもわかるように〈俗〉人的であり、世俗の中から抜け出すことを強く願い、もがき発した評論ではなかったか」と結論に記す。この結びと結論は、従来指摘されなかった米芾の人間性、内面性に関する内容で興味深く、さらなる考察を期待するものである。

結論の(1)～(4)は各章の考察結果をまとめたものであり、評価は上記の通りである。よって主たる研究成果は、次の2つの知見を提示できたことがある。

- A 米芾の書跡、書論から、米芾が〈平淡〉を自覚したとする時期を、その形態的特徴を統計学的に数値解析して、〈平淡〉を数値化し、図式化し得たこと。
- B 『宋代詩話』から206文の〈平淡〉の叙述を抽出して、宋代の文人達が用いた〈平淡〉の意味を解明し得たこと。

この2つの〈平淡〉に関する知見を提起し得たことは、大きな成果であると評価する。

加えて、〈平淡〉をめぐる、中田勇次郎氏の「高い脱俗した逸氣」、L. レダローゼ氏の「平静なおちつき」、塘耕次氏の「作為の無い自然な表現」、大野修作氏の「作為をきらって平淡天成を貴び、天真が「意の外」にあらわれる境地」などの先行研究の解釈が、稿者による分類にいずれも該当すること、言いかえれば従来の説を網羅的に補足する解釈を示せたことも評価に値しよう。

### 3. 結論

書道学専攻博士課程後期課程は、2013年7月29日に主査・副査担当予定者による中村薰氏の博士論文予備審査会を実施し、論文の提出が可能であると判断した。同年11月27日に審査委員会に論文の審査を委嘱されてからも引き続き直接の指導を行い、2014年2月10日に口述試験を行った。口述試験では、各委員が本論文に対して質疑した。中村氏はそれらの質問に一つひとつ回答した。特に統計学の手法によるデータ解析と、厖大な宋代詩話の資料を丹念に読み込んだ努力が、高く評価された。その一方で独自の解釈や推論を行う部分が少しくあり、より整合性をもたせるための緻密な論述が必要であると指摘された。この指摘は、論証をより万全にするための要望であり、評価するが故の要望である。

よって審査委員会は、口述試験を合格と判断した。

以上の審査内容および評価に基づき、本論文を審査の対象とする博士（書道学）学位審査委員会は、中村薰氏が博士学位を授与されるに適格であるものと全員一致で判断したこと茲に報告する。